

「恋草からげし八百屋物語」試論（下）

——『心中万年草』との関連を中心に——

有 働 裕

西鶴の『好色五人女』刊行と、本稿（上）で扱った海音の『八百屋お七』の初演には、約三十年の隔たりがある。その間には、詳細は不明ながら、八百屋お七物のさまざまな芸能が成立している。西鶴の「恋草からげし八百屋物語」の何が後続作品に継承され、何が継承されなかったのかを考える場合、当然のことながらそれらの検討がなされなければならない。本稿（下）では、近松の『心中万年草』を中心に論ずるが、八百屋お七に関連した歌舞伎・浄瑠璃・謡曲・歌祭文についても言及し、その上で西鶴の特異性について述べてみたい。

五、お七演劇化の嚆矢

八百屋お七の戯曲化の嚆矢は、宝永三年（一七〇六）正月に大坂嵐三右衛門座で上演された吾妻三八作『お七歌祭文』であったと思われる。ただしこれは、立川焉馬の『歌舞伎年代記』巻一（注1）の次のような記述によってわずかに知ることができ

るのみである。

今年正月、大阪嵐三右衛門座にて、女形嵐喜代三。八百屋お七を勤る。これお七狂言の始なり。

また、『歌舞伎年表』にも、宝永三年に以下のような記述がある（注2）。

○正月、大阪、嵐三右衛門座、初狂言「女大臣職人鏡」。江口（喜世三郎）……（杉山平八）。瀧岡彦右衛門の实事。切、「お七歌祭文」。吾妻三八作。八百屋お七（喜世三郎）小姓高安吉三郎（平八）旦那寺の住持（春山源七）伯父高安惣左衛門（小佐川重右衛門）異見してお七吉三郎と縁を切る。（京阪・その他の部）

○正月、大坂、嵐三右衛門座にて嵐喜代三、「八百屋お七」の狂言大当たり。江戸までも評判。（江戸・東京の部）

これらの記述から、嵐喜世三郎のお七役が大当たりであったほか、吉三郎の伯父高安惣左衛門が意見してお七と吉三郎の縁を切らせようとするという場面があったことがわかる。役回りからいってこの惣兵衛は、後述する近松の『心中万年草』の千右衛門、海音の『八百屋お七』の十内の前身といつてよいだろう。

この他に、当時の歌舞伎評判記にもこの上演に関しての記述があり（注3）、たとえば、『役者友吟味（大坂之巻）』（宝永四年三月）には、吉三郎の「墓のまへにてお七にあふてのつめひらき」という場面があったことが記されている。また、『役者將基大全綱目（大坂）』（宝永五年正月）の記述からは、春山源七の演じる「旦那寺の住持」がお七と吉三郎に対して情け深く庇う場面があったことが窺える。しかしながらそれ以上のことは、これらの記述からは推定し得ない。

この喜世三郎による八百屋お七は大評判となり、『歌舞伎年表』によれば、宝永五年正月に江戸中村座の『傾城風曾我』の中で再演され、さらに宝永六年の三月と秋にも中村座で、同年十月には大坂嵐座で興行があったとされている。

喜世三郎はこのほかに宝永五年（一七〇八）三月、江戸中村座での中村清五郎作『中将姫京雛』でも八百屋お七の役で評判をとったとされている。その『中将姫京雛』の初演について『歌舞伎年表』には次のように記されている。

中村座、「中将姫京雛」一名「追善彼岸桜」。作者、中村清

五郎。梅枝ノ内侍（藤村半太夫） 秋山角右衛門（小四郎）
糸ノ八郎（伝五郎） 中将姫（喜代三郎） 大膳太郎（半三郎）
唐橋大臣（山中平九郎） 赤松藏之介（又太郎） 下人太郎吉（兵助）。

中将姫の世界へ八百屋お七を仕組み、且つ五番目は七三郎の追善也。「彼岸桜」といふ小名題なり。七三郎臨終のさま。

この歌舞伎の脚本は、『元禄歌舞伎傑作集（上）』（早稲田大学出版会・大正十四年）に収められており、詳細を知ることができる。その内容は一言で言えば、中将姫の世界に八百屋お七を組み入れた、極めて散漫で強引な時代・世話混淆の作品といえよう。

第一番目は聖武天皇の御代という設定で、悪臣の鏡の大臣が唐橋の宰相と梅が枝の内侍の仲を裂こうとし、さらには三種の神器を盗んで朝敵にならんとするが、露顕して追ひ払われるというもの。第二番目では、唐橋の宰相と梅が枝の内侍の婚礼の日に中将姫が現れて騒動となる。中将姫は梅が枝の内侍の異母姉であり唐橋の宰相とは許嫁であつて子までなしていたが、継母の悪計により雲雀山で殺害されるところを家臣藤原春時らによつて助けられていた。混乱の中で継母とその弟の大膳が唐橋家の実権を握ることとなり、唐橋宰相・梅が枝・中将姫らは散り散りになつてしまふ。

八百屋お七が組み入れられているのは第三番目からである。その後の騒動の中で梅が枝は亡くなり（実は薬師の化身であったという演出）、唐橋宰相は武家の奉公人となった藤原春時の弟として、本郷妙円寺の小姓となり吉三郎を名のっていた。一方中将姫は、人買いに捕らえられていたところを、妙円寺を檀那寺とする本郷の八百屋弥右衛門に見出されて養女お七となっていた。お七は、密かに吉三郎と文のやり取りをしていたが、弥右衛門に露見してしまう。弥右衛門は実はお七に下心があつて養女にしたのであり「一夜なびけ」と迫る。「今一度吉三郎殿に逢ひたい。其上にて」と答えたお七に「目の黒き内はならず。もし死し（マ）にらば、親なれば弔ひあらん。その時は寺へ行け。命の内はならぬ」と弥右衛門が答えたのでお七はすぐに養父を刺殺した。そこへ唐橋宰相（吉三郎）の旧臣らが現れて善悪入り乱れての騒擾となるが、悪人らはすべて討たれる。唐橋家と中将姫の横佩家とは目出度く治まり、中将姫は幼い時からの志を果たして出家をする。

続く四番目からは、中村七三郎の臨終の様子を脚色した追善のための一場となっている。

この脚本において確認しておきたいことは、寺小姓の吉三郎と本郷の八百屋の娘お七という設定を用いながらも、お七の罪は火付ではなく養父殺しであり、お七の処刑の場面もなく、「恋草からげし八百屋物語」の展開とはかなりの距離があるということである。さらには、吾妻三八作『お七歌祭文』で評判であつ

た、伯父高安惣兵衛が吉三郎を責めるような場面もない。嵐喜世三郎がこの芝居でもお七を演じてはいるものの、その筋や趣向は『お七歌祭文』とはかなり異なっていたのであろう。

結局のところ、八百屋お七物の戯曲化の嚆矢と思われる『お七歌祭文』やそれに続いた『中将姫京雛』においては、お七と吉三郎とが登場することが確認しうるので、お七の火付、引き回しと火刑、その後の吉三郎など、竹野氏の言う「西鶴―海音の遺産」と呼ぶべき要素は何も確認できないということになる。

六、歌祭文における八百屋お七

八百屋お七の戯曲化の嚆矢が『お七歌祭文』と題されていたことは、当然のことながら先行する歌祭文が存在していたことを示唆する。史実や後続作品との関連から「恋草からげし八百屋物語」の再検討を試みる以上、八百屋お七に関する歌祭文を無視することはできない。

八百屋お七の歌祭文として今日伝えられているものは多数あるが、とりあえず『日本歌謡集成 第八卷』（注4）に収められた、「八百屋お七歌祭文 上」「お七恋の燃えくひ 下」「京風 江戸八百屋お七歌祭文」の三つを対象として述べる。いずれも成立年は未詳であり、『好色五人女』に先行するか否かについては本稿の（上）でも述べた通り未確定ではあるが、詞章から考えて、西鶴の影響下に成立した可能性が高いと思われる。

「八百屋お七歌祭文 上」は、「うやまつて申し奉る、笛に寄るねの秋の鹿、妻故身をばこがすなる、五人女の三の筆」と語り始められる。「好色五人女」巻四のこの物語を「五人女の三の筆」とする齟齬は見られるものの、西鶴との直接的な影響関係は明確であろう。これをもつてこの物語を三番目に据えた五人の女性を扱って寄せ本があつたとする野間光辰氏の説もあるが（注5）、『好色五人女』が意識されていたからこそその誤記と捉える諏訪春雄氏の説の方がやはり説得力があるように思われる（注6）。

これに続く、「恋路の闇の暗がりに。由なき事をしいだして」という記述も、「恋草からげし八百屋物語」の「よしなき出来心にして」という記述との距離の近さを感じさせる。一方、それに続く代官とのやりとりには、西鶴の「是を尋ねしに、つ、まずありし通りを語りけるに、世の哀れとぞなりにける」という簡略な記述からは飛躍した、お七への同情を込めた具象化が窺える（句読点・鉤括弧は有働が適宜に付した）。

代官所へ申し上げ直に御前へ引き出す。時に代官仰せには、「年はも行かぬ女にて、かゝる大事をしけるぞや。咎の次第を有やうに申し上げよ」と仰せける。お七泣く／＼申す様「いつぞや類火にあひしとき。親子諸共立ち退きて。普請成就いたす迄。檀那寺にて仮住居。縁はいなものこの寺の。小性吉三と自らが。親にかくして二世迄と、小指を切

つて血を絞り。起請を書いて取り交し。枕定めぬその中に。屋造り成就仕り。名残惜しくもそれよりも。もとの本郷に帰れども。二世とかねたる吉三には生きて別る、悲しさは文の便りもならざれば。寝てゐて思案いたするに。又もや家を焼くならば、夫の吉三にゆる／＼と、逢うて語らんうれしやと思ひ定めて夕暮に、一束の藁に火を包み、放り上げたるばかりにて、燃ゆる仔細は候はず。もはや重ねて致すまじ。只御慈悲に此の度は、何卒助け給はれ」と、あどなき言葉さりとは、哀れ至極の言い訳と、側に在りあふ心なき奴の角内、角介も髭は涙で流しけり。

このようにお七の口から二人の馴れ初めから放火までのいきさつが語られる。小指を切つて起請文を書くといった類型的な展開は、何らかの演劇からの撰取であろうか。また、まず、吉祥寺から戻つて以来、逢瀬はもちろんのこと、文のやり取りさえできなかつたとされているところも、西鶴との相違点として目を引く。言い換えれば、西鶴のものからは、お七が火付けという行動を選択するだけの切迫性が読み取りにくいのである。

そして最大の特徴は、お七の発想の幼さにある。再会のために火付をすることはもとより、ありのままに代官に告白して温情を乞うという、あまりに無垢な幼さが周囲の者たちの涙を誘っている。

「お七恋の燃えくひ 下」は、「八百屋お七歌祭文 上」に続

く顛末を語るもので、お七が処刑される鈴の森に駆けつけてきた、母親の次の嘆きがまず語られる。

母は涙のひまよりも、「差程吉三に添いたくば、我に密かに知らせなば、是非とも和尚に申し請け、行末長く添わはせうに、かゝる大事をし出して、親の憂き目を見すること、子にてはあらで敵かや。花の娘を先に立て、後に残りて何かせん共に消えん」と嘆かる、。

お七の放火が紛れもなく親不孝な行為であることが強調されると同時に、なぜその思いを知らせてくれなかったのかという悔恨が吐露されている。つまり両親はお七と吉三郎の仲に気付いていなかったという前提であり、吉三郎と同衾したお七を母親が翌朝に連れ去る西鶴の設定とは異なっている。また、お七に対する親の悔恨の情には、近松の『心中万年草』や海音の『八百屋お七』と通じるものがある。

このように嘆く母親に対し、お七は「嘆き給ふも道理なり」と述べつつも、「定まる事とおほしめし、思ひあきらめ給ふべし」と、これが宿縁であったと述べる。そこに吉三郎が駆けつけてくる。お七は人目も恥じずに縋りつく吉三郎の手を取って、「此の美しきお姿に何の命を惜しむべき。われを不便とおぼすなら、出家になつて無き後を弔うて給はれ吉三殿。この世の縁は薄くとも、長き来世で添ひましよ」と告げる。吉三郎の出家がお七

への報いとなる、すなわち、それによって二人は来世で結ばれるということを確認し合っているのである。このやりとりは西鶴の「恋草からげし八百屋物語」の展開に比して単純かつ通俗的であるといえる。

そして、この歌祭文の結びは次のようになっていいる。

哀れなるかなお七こそ、十六歳を一期とし、遂に煙となり果つる。清の誠これぞこの、煩惱すなはち即菩提、悟れば近しそのまゝに、迷ひもはれて吉三郎、すぐに出家の身となりて、お七の菩提を弔はれける。問ふも語るも一昔、只世の哀はこれなりと、うやまつてまうす。

歌祭文が本来持つ死者の追悼という様式に即して、お七吉三郎の煩惱も、その一途さゆえに「即菩提」として語り終えられる。極めて通俗的であり、またそれゆえに受け入れられやすい結末であると言えよう。

現存するもう一つの八百屋お七を扱った歌祭文「京風 江戸八百屋お七祭文」は、先の二つをひとまとめにしたものであり、若干の記述の違いは見られるが、おおむね同内容である。

これらの歌祭文は、元禄時代にはすでに各地の盛り場で流行していた。そのことを諏訪春雄氏は、宇治加賀之掾作の「四条河原涼八景」の中に詠み込まれていることを指摘して証明している（注7）。宝永三年の狂言の外題が『お七歌祭文』であっ

たのもそれ故であろう。

この歌祭文と西鶴の「恋草からげし八百屋物語」との関連について、諏訪春雄氏は次のように述べている（注8）。

さて「八百屋お七歌祭文」の成立を西鶴作以降と考えても、お七が奉行の前に引き出されて取り調べを受けたこと、お七と小姓吉三郎とが血の起請文を取り交わしたことが、二人がまだ枕を交わさぬうちにお七の家の普請が成就して、飽かぬ別れをしたこと、お七が放火の際に一束のわらに火を包んで放りあげたこと等、歌祭文に記す内容はいずれも、西鶴作には触れていなかったり、一致しない事柄であっても、全体としてお七のあどけなさを強調した作風と併せて、この歌祭文の作者が、西鶴作の存在は知っていても直接の参考にはしていなかったことを示している。

このように、西鶴からの直接的な影響について諏方氏は否定的である。しかしながら、諏訪氏の考察は、お七に関する「史実」が存在し、『天和笑文集』等がそれを伝えているという前提に立ったものであった。拙稿で述べたように『天和笑文集』の記述が宝永以降のものとする、むしろそちらが歌祭文の影響を受けたものと考えるべきであろう。そして、西鶴の展開と歌祭文とのずれは、その不自然なまでに特異な展開を、通俗的なものに置き換えたものととらえるべきではないだろうか。

つまり、これらの歌祭文は、歌舞伎や浄瑠璃のお七物に比して、西鶴の「恋草からげし八百屋物語」との密着度が高いということが出来る。したがって、西鶴が創作した特異な展開が、単純かつ合理的なものに改編されていく過渡的形態にとらえるのが妥当ではないか。だとすれば、おそらくは元禄期の成立ということになるう。

七、謡曲「恋の火」と『夏虫』

成立時期についてはやはり検討を要するものの、この前後に成立した可能性を有する、お七を題材とした謡曲が二作品存在することが指摘されている。これらの位置づけについても考えておく必要があるう。

まず、竹野氏が元禄十六年以前に成立した可能性もあるとしたのが謡曲「恋の火」（注9）である。房州誕生寺の僧が池上本門寺に籠った後に品川鈴の森を訪れる。そこで出会った浮かれ女が、「童は是より北に当り。本郷辺に住し者。ま、しき母の讒により。此辺りに捨られて」と語ったので、過ぎにし江戸大火の折に寺の「うつくしき少人」と恋仲になった娘がおり、「よしなき罪におかされて。爰にて命をとゞめ」たことに僧は思い当る。そしてその娘の幽霊であることを確かめて成仏を祈る。

また、新春を迎えて親とともに本郷に帰宅した後、恋人に逢いたい一心から火付けを行い、火刑となったことが、以下のよ

うな記述によつて暗示されている。

別れをとむる柵しがらみも、なき世の中はあだ夢の。化あだに、契りし
佛の。忘れんと思ふ心社こころのやしろ。忘れぬよりは思ひなり。天の原、
踏轟かし鳴神も。思ふ中をばよもさけじ。只此宿を失な
はゞ。恋しき人の栖すまひにも、二度帰ふたり。見もし見えなんと。
またしどけなき恋ごゝろ。ながき、別のもとひととは、今こ
そ思ひしられたれ。(中略) 去程に。く、壁に耳、岩の
物いふ、憂世のさがなき。悪事千里を、走るならひの。程
なく憂身を。るみせつの責に。獄屋にこめられ。口々に晒
し、二度跡に、帰らぬ道芝の。露も佛も、はらくほ
ろくど。かゝる因果の、報ひを思へば。身より出せる邪
淫の罪に。花の姿も、けふ迄の。限りは品川の、海辺かいへんに立
る、火の柱に。うき身を焼ば。其儘奈落に、をちこちの。
焦熱の焰。ごくそつの呵責。是々見給へ、浅ましや

「踏轟かし鳴神も。思ふ中をばよもさけじ。」などの記述から
は、西鶴の「虫出しの神鳴もふんどしかきたる君様」からの影
響が感じられる。一方、継母に関する唐突な記述は、『中将姫
京雛』と関りがあるのだろうか。その点も勘案して、やはり元
禄から宝永にかけての成立ではないかと思われる。

また、同じく八百屋お七のことを題材にしたと思われる、成
立年代未詳の謡曲に『夏虫』(注10)がある。

都から東国に下つた僧が、その途中で鈴の森を訪れたところ、
牛を引いている女に出会う。不審に思つて僧が尋ねると、次の
ように答える。

此上は何をかつ、み参らせん。我は本郷追分の何がしが娘。
しちと申す女なるが。恋慕にこがる、心とて。いとゞくる
しきせうねつや。大せうねつの焰の中に。しづみ果てにし
此身のすへ。責てうかふや涙の露。消し浮身の理りを。あ
はれみ給へ御僧。(中略) 千里をかくる悪事ゆへ。おもき
とがめを身の上に。引回されて行雲の。立迷ひつ、出汐や。
さすがに今は罪科の。はたじるし指かざし、隙行駒の足は
やみ。小路くも打過ぬして。見物くんじゆのその思ひ、
おもきが上のさよ衣、我つまゆへにあま雲の、かゝるうき
身となら芝の、ゆふ付の鳥の声。おなじ浮身となげきわび。
扱も命はなが、れと何いのりけん世の中の。神や仏も我ら
をば。捨させ給ふぞ恨めしき

過去の罪業を語り終えると、女は突然現れた火の車に打ち乗つ
て姿を消していく。『恋の火』では女の名は不明だが、こちら
では「しち」と名のつている。また、処刑前の引き回しの様子
(見物くんじゆのその思ひ)が記されている点も、より具体的
であるといえる。

田中充氏はこの謡曲について次のように述べている(注11)。

元禄正徳の交から流行したらしい「飛んで火にいる夏の虫」という諺をふまえて、夏の虫と題したらしく、本文には夏の虫と題するに足る言葉は見当たらない。文辞脚色ともに上出来とは言えず、キリは女郎花を真似ている。やはり戯作の類とすべきである。

『恋の火』『夏虫』ともに、事件の過程についてはあいまいではあるが、火刑の苦しみにについては印象的に語られる。煩惱抑えがたきがゆえに罪を犯し、鈴ヶ森で焦熱の苦しみを負う女が成仏できないでいるという、謡曲の定型に単純化された稚拙な作ということができよう。

これらの謡曲が、西鶴の「恋草からげし八百屋物語」の影響下に成立したのか、歌祭文などの伝承に取材したものか、断定することは難しい。すなわち、所謂「西鶴―海音の遺産」の形成とのかかわりは不明という外はない。ただ、恋ゆえに火付の罪を犯した娘が品川で火刑となる、という題材の刺激性が新作の謡曲まで生み出したことには注目すべきであろう。

八、近松の『心中万年草』(一)―上の巻

西鶴の八百屋お七が受容されていく経緯を的確に指摘していた竹野氏の論文において、一つだけ言及し残した作品があった。それは、宝永七年大坂竹本座初演と推定されている近松門左衛

門作『心中万年草』である。この作品と八百屋お七との関連性、そして海音の『八百屋お七』への影響については、浄瑠璃研究においてつとに指摘されていた(注12)。

『心中万年草』は、高野山南谷の吉祥院の寺小姓成田久米之介(十九歳)と神谷宿の雑賀屋与次右衛門の娘お梅(十七歳)との心中を語るものである。久米之介は播州の大名に仕えていた成田武右衛門の息子であるが、十二歳の時に誤って父の同僚伊吹千右衛門の弟を殺してしまふ。本来切腹のところを、千右衛門の親のとりなしによつて高野山での出家で許されたという身の上である。一方お梅は、京都の美濃屋作右衛門との祝言がまとまっていた。作右衛門は、お梅目当てで借金百六十両を帳消にした上に二百五十両を預けたので、お梅の親はこの縁談を拒めない状況にあった。

諏訪春雄氏は、実際に高野山で起きた心中事件があり、そこに『好色五人女』や歌舞伎等の要素を取り入れたものと推定している。以下、近松の『心中万年草』を通して、海音の『八百屋お七』へと至るお七伝承の変容の過程を考察することにする。

・上の巻「高野山南谷吉祥院の場」

上の巻「高野山南谷吉祥院の場」は、播磨の大名の使者を迎える準備に忙しい中で、小姓衆や下男たちの会話から始まる。その中で、小姓の久米之介は雑賀屋の娘お梅との仲を朋輩たちからからかわれている。そこへ雑賀屋の駕籠昇き九兵衛がお梅

からの文を届けてくる。ところがその中身は吉祥院法印に当てたもので、久米之介の父武右衛門が隠居するため息子を国元に戻したいというものであった。実は、これはお梅が久米之介と添いたい一心から巧んで作成した偽物の文であって、本来は法印に宛てたはずのものが、久米之介への恋文と取り違えられて届いたものであった。すなわちお梅の恋文は法印に届いているのであり、このことが二人を逃げ場のないところへと追い込んでいくことになる。

そこに播州からの使者伊吹千右衛門が到着し、その口から久米之介が高野山で出家する身になったいきさつが語られる。そこへお梅の手紙を見て激怒した法印が駆け込んできて、久米之介の罪を厳しく攻め立てて破門する。破戒を咎める高野山の天狗の怒りによるものか、にわか暴風落雷の荒れ狂う中、久米之介は山を追放される。以上が上の巻の梗概である。

ここでは、吉三郎の役に当たる久米之介が、そもそも出家を避けられない状況にあり、「恋草からげし八百屋物語」よりもはるかに切迫したものになっている。伊吹千右衛門の設定は歌舞伎『お七歌祭文』で評判となった高安惣左衛門（吉三郎の伯父）をふまえたものである。このように吉三郎を窮地へと追い込んでいく状況設定は、海音の『八百屋お七』へと受け継がれていくものである。

それとは逆に、他のお七物では消えてしまう男色の要素が、この『心中万年草』には存在している。

久米之介とお梅の関係が暴露された時、久米之介の念者坊である祐弁律師がその場に居合わせており、以下のように激怒する。（坂口弘之校注『新編古典文学全集 近松門左衛門集②』（小学館）を底本とし、句読点・鉤括弧は適宜有働が補った。）

祐弁律師走り出で、久米之介が袴腰、割る、ばかりに、踏み付け、引き起し、歯がみをなして、涙を流し、「エ、見損なうた、忤め。その根性とは夢にも知らず、兄弟の契約のねんごろしたは何事ぞ。雑賀屋にはお梅といふ、若い娘もあるほどに、出入りするには行儀が大事、浮名ばし立てられな、若衆のたしなみこれ第一、兄分に恥か、すなと、立居に言うを忘れたか。これ千右衛門殿、今まで愚僧が存ぜしは、彼めは敵持つたる身。もしも狙ふ人あらば、抜き身の下へこの法師が、駆け入つて討たれんと、一命やつたる仲なれども、只今ねんごろ切る上は、金、胎兩部の大日も、御照覽まします。不便とも存ぜず、御舎弟の敵、サアお手にかけられよ」と、座敷の下へ取つて投げ、「俗の女を慕ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千まさるぞや。その兄分を袖になし、志を無下にした。憎や、無念や、あさましや」と、氷のやうなる眼より、涙をはらりとぞ流しける。

この『心中万年草』において祐弁律師が登場するのはこの場面

だけであり、お梅と久米之介の心中譚には不必要とも思われる展開である。それだけに、西鶴の「恋草からげし八百屋物語」における吉三郎の兄分の痕跡とみなすことが出来る。

西鶴はこの兄分については、松前に赴いている間この寺に吉三郎を預けたということ以外、具体的には何も記していない。そして吉三郎の出家後も「古里松前にかへり、墨染の袖とはなりけるとや」と記すのみである。だが吉三郎が兄分の怒りを恐れて極度に煩悶するのは、僧と武家との違いはあるとはいへ、念者に対する裏切りが『心中万年草』に見られるような修羅場へと必然的につながる事が背景にあつてのことであろう。いわば西鶴が敢えて描かずに「ぬけ」の手法で示したものを、具体的に描き出したのが近松のこの場面とみなすことができる。

そのようにとらえてみるならば、この後に続く久米之介と祐弁律師のやりとりは、「恋草からげし八百屋物語」の最終章における吉三郎のなんとも優柔不断な態度を解く鍵となるように思われる。千石衛門が、本来ならば弟の敵として討たねばならないところを、峰打ちという形で許すと、次のような久米之介と祐弁律師とのやりとりが続く。

久米之介わつと声を上げ「口今のむね打ちも、討てうたる、身の報い、恥辱とも思はねども、山のなごりに、法印様の御機嫌損なふ悲しさと、二世と頼みし兄分を、袖にしたとの恨みの言葉、悲しうてく死んでも迷ひとなります。

疾く^とに髪を髪を剃つたらば、この悔みもあるまいもの、坊主頭のすげない顔兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳^{はたち}をこすまでと、鬢^{びん}をなで、顔つくり、身だしなみが身の敵お梅に思ひ初められた。これも先世^{さきせ}の因果かや。お梅に逢うて理^{ことわり}たて、縁を切つてきましたら、元のやうにねんごろに、かはいがつてくださるか。「おんでもないこと。女と縁さへ切つたらば、身に代へても法印様へ詫言^{わひご}申して、ねんごろせうが、まことに縁を切らずば、大師の罰^{ばち}を受けう」といふ。「誓文^{せいもん}を立てうか。「いかにも誓文立てませう。」サア立て。サア何と。「エ、こちらは切らうと思へども、お梅が合点せぬ時は、何としませう。悲しや」と、かつばと伏して泣きければ、「それ、その心をつくこそは、罰の当つたるしるしぞや。はや出て失せう」と、どうど伏し、共に泣きするこそ道理なれ。

この場面において、久米之介はお梅よりも祐弁律師との関係を優先させ、お梅のことはきつぱりと思ひ切るので「元のやうにねんごろに、かはいがつてくださるか」と許しを乞うている。しかしその直後に、「お梅が合点せぬ時は」という迷いも見せている。ここは、久米之介がたとえお梅を思い切ったとしても、お梅という女人の執着心は如何ともしがたい、ということへの不安を述べたものと解される。

念者との関係を女性との恋よりも優先するのが衆道としては

当然であり、女性との関係は可能であれば無視したいものではない。とはいえ、たとえ自分は思い切れたとしても、相手の執着がそれを妨げることに不安を覚える。それゆえに、女色に走ったことに対する深い悔恨が吐露されている。ただし、この後の展開から考えて、この『心中万年草』での久米之介のことばは、あくまで祐弁律師に対するその場しのぎの方便ととらえるべきものであろう。

ではここから遡って、「恋草からげし八百屋物語」の、お七処刑後の吉三郎の煩悶をとらえ直すところのようなことが言えるのか。

お七の火付も処刑も知らずにいた吉三郎は、「此女にこゝちなやみて、前後を弁ず、憂世の限と見えて、便すくなく、現のごとくなれば」と病みつき、与えられた薬も拒んで「君よ恋し、其人まだか」とうわごとを漏らしている有様である。ここではお七を恋焦がれるあまりに病みついたとしか理解できず、兄分の存在は全く眼中にない。

後続の八百屋お七物を視野に入れた場合、引き回され処刑されるお七の姿を吉三郎が見る、という劇的展開こそ期待されるべきものであったといえるが、西鶴はあえてそのような展開を避けている。そして吉三郎が知らぬ間にお七は処刑されてしまっている。群衆の中で注目を浴びて先に死なれてしまったため、久米之介のようにその執着心を懸念する暇もないうちに、今は亡きお七の思いから逃れ難い状況となってしまった。さら

にお七の親の「流石人たる人なれば、此事聞きながら、よもやながらへ給ふまじ」という吉三郎を思いやったことばは、後追い心中の可能性を暗示させるものといえよう。しかしそのように予測する読者の期待を敢えて裏切るような形で物語は展開する。

まずお七の卒塔婆を見た吉三郎はその名に驚いて、「ざりとては、しらぬ事ながら、人はそれとはいはじ。おくれたるやうに取沙汰も口惜」と自刃しようとする。ここで強調されているのはお七への思いよりも自身の体面である。それを長老によって留められるのだが、この折初めて読者は吉三郎の兄分の存在とこの寺に預けられたいきさつを知る。寺小姓であることや「長老様がこはや」などの発言から容易に予想されたことや「心中万年草」のような義務付けられた出家などとは異なる唐突な展開といえよう。しかもそのいきさつも極めて茫洋としており、後のお七物に見られるような緊迫した事情は記されていない。とはいえ、寺の者からも「情の深き御方」と評されていたわけであるから、十七の若衆盛りを謳歌していたことは既に伏線として示されていた。そのような吉三郎が、兄分への義理をお七の死によって妨げられ、煩悶する姿に西鶴は筆を費やしているわけである。

九、近松の『心中万年草』(二) — 中・下の巻

さて、久米之介は宿命づけられた出家という道を踏み外してしまい、この後はお梅との駆け落ち、心中へと展開する。そのような設定こそ大きく異なっているが、「恋草からげし八百屋物語」との関連が明確な要素も含まれている。

・中之巻「神谷の宿雑賀屋の場」

中之巻「神谷の宿雑賀屋の場」は、今晚に迫ったお梅の祝言を準備するあわただしさの中で始まる。婿となるのは、京烏丸の富商美濃屋作左衛門である。お梅がすっかりふさぎ込んでいるところへ、打擲されたままの姿の久米之介が頬被りをして現れる。そして、久米之介からお梅の策略が失敗したことを聞いて落胆する。それでも駕籠昇きの九兵衛はお梅の両親に、今夜の祝言を取りやめてお梅を久米之介に添わせてはどうかと勧めらる。それに対し父親の与次衛門は、次のように作右衛門との縁談のいきさつを語る。

いや〜馬は馬連れ、牛は牛連れ、今日祝言する婿殿は、京三条烏丸美濃屋の作右衛門。お梅を欲しいばつかりで、年々の残金九貫五百目、百六十両で帳消して、この秋買入りに、紅の花のやうな小判二百五十両、先へ預けて置かれた。今宵の物入り、仕こしらへ、こちには一文入れさせず、

娘を裸でなら、鬼に金棒でござりましよ。

このような、大金に縛られての祝言が直前に迫っているという設定は、先行する八百屋お七物の演劇類に倣った可能性も考えられる。この作右衛門の役回りは、海音の『八百屋お七』の武兵衛へと継承されていく。

このあと両親は不用意にもお梅と久米之介を新しく用意された寝道具の敷かれた二階へ上げてしまう。その後には作右衛門が小者を連れて登場し、居丈高に与次衛門をのしりながら打擲を加える。作右衛門の口からお梅と久米之介との仲を聞かされた両親は、娘の思いを遂げさせてやる決心をし、母親はわざと二階へも聞こえるような大声で、作右衛門に次のように話す。

都衆とも覚えぬ、ものの情けないことや。これほどまで取り結び、サア祝言の場となりて、打ち破つて、こち夫婦世間が立たうか、身が立たうか。男を持たぬ娘子は、誰が身の上に何事の、あるまいとも言ひ難し。過ぎつる事に、二親が迷惑するを聞かぬならば、気の細い娘なり、先の小姓も堪へかねて、死なうとするは必定。止めにかかると、時宜でもなし。かならず死ぬるな、死ぬまいぞ。こ、は死ぬる場でないぞ。親に嘆きをかけるといひ、その身もない難受けること。親孝行と思はば、かならず死んでくれるな。

お梅は「幼き時よりも、甘やかされて二親に我儘」を言つて育ち、その上に寺小姓と密通して親が定めた縁談を壊してしまふのであるから、親不孝この上ない娘と言えらる。にもかかわらずその両親は、その娘の思いを認め、なおかつ心中という道があることすらほのめかしている。お梅の気持ち肯定しようとする親心は、海音の『八百屋お七』のお七の両親に継承されていくことになる。

この後、作右衛門が二階に上がつていくと、お梅の両親の指図で祝言の石打ち騒ぎが起り、その混乱の中で、母親は久米之介の手を引き、お梅は久米之介の帯を取つてその場を逃げ出すのだが、その際に母親が久米之介の耳元で、さ、さ、やくという場面がある。

お梅は後にも恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を踏むごとく爪立てて、震ひく／＼沓脱まで忍び出で、母、久米之介に囁きて、「こなたは命のない人なれど、お梅が嘆く不便さに、こち夫婦が丁箇で、今宵の命を助ける。お梅は男定まれば、思ひ切らねばならぬぞや。これはお梅が飲んだ杯、これを形見の縁切り」と、懐に入れければ、二人は死ぬる覚悟のうへ、心の中の暇乞ひ、顔は見られぬ暗闇に、ま一度声をとためらへば、遅い／＼と気を急ぎ、急ぐは我が子の死を急ぐ。

母親は「縁を切れ」と口では言いながら、久米之介とお梅を駆け落ちへと導く。この場面は、「恋草からげし八百屋物語」におけるお七の母親の吉三郎へのささやきを趣向として踏まえていると思われる。この状況と母親の話す内容とは、確かにささやきでなくてはならない必然性がある。西鶴の趣向を継承していく過程において、その不明確な部分を、納得しうるように変形させたものととらえることができよう。

・下之巻「久米之介お梅道行」「高野山女人堂の場」

神谷の与次右衛門宅を逃げ出したお梅と久米之介は、身の上を嘆きつつ夕暮に女人堂に着く。そこには、久米之介を訪ねて播磨からやってきた姉のさつが泊まっていた。さつは目の前にいるのが実の弟とは気づかず、父親が亡くなつて今日が初七日であること、その遺骨を持参していることを告げる。さつと別れた後、二人はそれぞれの親への不孝を悔みつつも、潔く心中を果たす。

先にも述べた通り、諏訪春雄氏は高野山での心中が実際にある以上、八百屋お七ものの歌舞伎からの摂取があつたにしろ、そこから大きくそれていくのは当然のことである。

ただ注意しておきたいのは、破局へと向かう二人が親に対する不孝を強く意識していることである。加えて、久米之介が父親の遺骨と対峙しなくてはならなくなるといふことである。こ

の二つの設定は、海音の『八百屋お七』へと継承されていくことになる。

十、結語―西鶴の特異性―

冒頭に述べた通り、本論文の目的は、そもそも八百屋お七の実説などは存在していなかったということを前提として、「恋草からげし八百屋物語」の解釈を再検討しようというものである。

とはいえ、実説とは言えないまでも、素材となり得るような事件はいくつかあったものと思われる。たとえば、『御仕置裁許帳』に記されている、「はる」のような存在である。

天和三年亥正月廿二日

壹人女はる 是ハ赤坂田町三丁目次兵衛店新右衛門下女、此者去ル十八日火を付申候を、穿鑿候處、一昨廿日右之段致白状候由、次兵衛、新右衛門召連来ル付、致僉議候處二、眞木之燃杭を持、雪隠え火を付申候、同類も無之、主え遺恨有り之候て付け候にても無之、物取候二付候二ても無之、不斗火付申度存、付候由申二付、籠舎、

右之者、亥二月九日於浅草火罪

この前後、江戸においては放火事件が多発しており、戸田茂睡は『御当代記』にその不穏な雰囲気について書き記している。また、それを事前に厳しく取り締まろうとした施策が、世相を一層殺伐としたものにしていたことは想像に難くない。そのな

かで、理由は定かではないが、少女が「不斗^{ふと}」火を付けたくなつてしまい、放火犯として処刑された。ひよつとしてその背景に悲恋があったのではという発想をしても、それは突飛というほどのものではないだろう。もちろん、火事のどさくさに紛れての駆け落ちというありがちな事件に比すれば、避難所での再会を願つての放火というのは一ひねりされている。

しかし問題は、そのような発想に基づいてなされた虚構化にもかわらず、散漫ともいえる特異な展開となつていくのである。それが後続の作者たちを悩ませ、物語の展開に必然性・合理性を持たせるための苦勞を負わせることとなつた。いいかえれば、その受け入れ難さにこそ、西鶴のオリジナリティは存しているということである。

そのオリジナリティとは何か。第一に、後続作品ほどには家の重圧を感じさせない設定であり、その中でお七の奔放で大胆な性格が強調されている点である。第二には、吉三郎の兄分の存在であり、お七の吉三郎への執着が衆道の義理と対峙されていることである。

近松の『心中万年草』や海音『八百屋お七』などに比して、「恋草からげし八百屋物語」の展開には悲劇としての必然性が乏しいことは既に述べた通りである。吉三郎が出家を迫られるという定めはなく、お七が他家へ嫁さなければならぬという設定もない。近松や海音では、それぞれの家の悲劇に巻き込まれた悲恋の物語としての結構が明瞭である。それに対して、西鶴の

お七は「いたづらなる娘」として自らの思いのままに行動する。その母親は一応は管理的ではあつても、それほどの重圧を感じさせる存在ではない。

そしてしばしば指摘されてきたように、喜劇的な筆致でお七の行動は描写されているのだが、同時にお七の心情が時おりストレートに表出されている点も見逃せない。吉三郎の刺を抜くよう母親から命じられた際の「うれし」や、雷の夜の「扱も、浮世の人、何とて鳴神を恐れけるぞ。捨て、から命、すこしも我は恐ろしからず」などである。当世の好色娘を奇異の目で見つめる一面がありつつも、単に突き放して描写するにとどまらないところに西鶴独特の筆致が見出される。

このような特異性に着目して考えるならば、お七は愛欲を制御できないままに奔放に行動する娘として造形されていると考へることができる。そしてその奇異な性格ゆえの究極の行動が衝動的に放火を思い立つということであり、さらには自らの因果を納得して処刑を受け入れるに至る。「恋草からげし八百屋物語」はまさに奔放なお七の物語として完結しており、吉三郎はそれに振り回される存在であるということが出来る。

とはいえ、終章である「様子あつての俄坊主」という後日譚は、あまりに突飛である。江本裕氏が指摘する通り、「構成その他、作品自体が内部分裂しかねない破綻を冒してまで、作者はなぜかかる設定をしたのだろうか」という疑問が生じる（注13）のだが、『心中万年草』以外の後続作品が受け入れること

を拒否したこの部分にこそ、お七はその存在感を発揮しているとはいえないだろうか。

後続作品が男色の要素を切り捨てたのは、当然のことながら、お七吉三郎の恋愛に余分な要素を割り込ませることを避けるためである。その中で、唯一この要素を残した近松の『心中万年草』で、久米之介と祐弁律師とのやりとりから読み取れるのは、衆道の義理を排斥せずにはおかない女の執念、愛欲の強さであった。西鶴が「ぬけ」として描いた吉三郎の煩悶を、明確に示したのが『心中万年草』のこの場面であつたと理解することができるのではないか。

すなわち、吉三郎はお七に潔く死なれてしまったために、どこにも逃げ道がなくなつてしまったのである。世間ではお七の相手はどうしたと噂され、そのまま生き長らえていることが問われていく。一方では、兄分がありながらお七に溺れてしまったことは言語道断であり、当然の如く厳しく責められねばならない。どちらにしろ、もはや自ら命を絶つしか道はなくなつていくのだが、そのことを自覚しながらも死ぬだけの決意も勇気もない、残酷な言い方をすれば極めて優柔不断で情けない男として吉三郎は描かれているように思える。

そんな吉三郎を救つたのがお七の母親のささやきであつたとするならそれは何か。硬直化した吉三郎の心情を氷解させてしまふような内容として、「本当は死にたくないのです。それに、自害してしまつたらお七の後を追つたことになり、兄分

に申し訳が立ちませんよ」といったものであったとは考えられないだろうか。吉三郎の体面を考えれば周囲に聞こえるようには言えない内容であり、「しばし」の、ごく短なさやきであったことからそのように推定出来る。かくして、吉三郎はお七が願った通りの余生を過ごすかはなくなったのである。

「此の前髪の散る哀れ」と「坊主も剃刀投げ捨て」るほどの美少年吉三郎は、「お七最期よりは、なほ哀れ」な出家を遂げることとなった。詰まるところ、お七の恋情が衆道と対峙する物語であり、それにお七は勝利したということになる。お七の奔放な愛欲とその執念の深さの物語として、「恋草からげし八百屋物語」は完結しているということができよう。

《注》

(注1) 文化八年刊。大正十五年の歌舞伎出版部刊の復刻版である風出版刊(一九七六年)のものによる。

(注2) 伊原敏郎『歌舞伎年表』第一巻、岩波書店・一九五六年。

(注3) いずれも歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成 第四巻』岩波書店・一九七三年より。

(注4) 高野辰之編、春秋社、一九二八年。

(注5) 野間光辰『刪補 西鶴年譜考證』中央公論社・一九八三年。

(注6) 『近松世話浄瑠璃の研究』笠間書院・一九七四年。

(注7) 注6と同。

(注8) 注6と同。

(注9) 田中充編『未刊謡曲集 十六』古典文庫・一九七〇年。

(注10) 田中充編『未刊謡曲集 十二』古典文庫・一九六八年。

(注11) 注10と同。

(注12) 松崎仁「心中万年草小考」『立教大学日本文学』第十七

号・一九六六年、諏訪春雄『近松世話浄瑠璃の研究』。

(注13) 江本裕『好色五人女 全訳注』講談社学術文庫、一九八四年。

(うどう・ゆたか 本学教授)